滑稽 夢輔譚

編

中

へ 13
3761
5

魂膽夢輔譚二編中之巻

江戸　一筆菴戯作

又布屋

斯て夢輔ハ
西の國なる猿俵の大守に魂を寂留て思ひの
外の見込ミ違ひ野郎の田楽なれども大に味噌を
すりしが濡にあハぬ粟九郎に愚痴をこぼして悔め
ども神輿がないて屏風と幕を借りて赤坂の出来ごとも
祇園の跡の祭りぞ詮なきのミなり只恨むらくハ美しき
奥さまを見ただけりせめてハお百仕でもと思ひし甲斐も

門 へ13
號 3761
巻 5

情なや夫のミならず二百両の金も忠太の不働きとんな
不埒屋のみでハなけれどせめてハ少しの意趣ばらしせ
若で立腹を横へせんと小首を傾け思案の腕ぐミ　但
見れバ裏ニ新店の薬の看板蘭方腹をまうる放
屁の薬と紺青入の板看板叓助八腹の内ニ思案し七
此薬を烟草ニ仕込ミ彼奥さまの使と偽り奥へ発参
そ入て出せバ殿さまちうじ女中まで此食を呑ぬハひのなじ
されバ御殿中が屁が出て騒動とのハ結構屁ぶらける

案のかんと我独腹に笑ひ腹に着へて薬屋の店に
来り屁をうけ　叓「モシ放屁散をおくれなせへ　薬屋の者「ヘイお出
なさりまし薬ハ一貼四拾八銅でござりやす一ぷく上げれバ
叓「そりやサマア一貼で済が二ふくで済ハ用方をお安
まうしてのるぞマア此薬ハ何に効ますかへ　こう「左様で
ござりますハ第一ハ腹脹膨後食傷合滞積聚痞塞
疝気動悸頭痛眩暈立ぐらミ総て四百四病ともに
屁に出して腹を空せまする散薬でござりまする　叓「ハテ

奇妙々薬でござる三役から四本柱の幣束扇弓の名捌き
「その角力でハござりませぬ薬で屁を放屁して直し
ます妙薬でござりますを 夢「するほど放屁にお世話薬でも
ひぐさことのハのイヤ貧の病と無の病に用ひて見さへ諸文
だが烟草へふくませて呑ますハ出来ませぬ人々「夫ハ名誉
手煙うござりません 夢「そんなら煙草三ぷくへ極効験を縦
まて紛種操りませう 主「左様でござりますト ぷつぷつパチパチとござりまき
「お捨の衆から上覧に出来まして煙草一ッぷくでざろと屁の

二十位ハ出ませぬ効がうるハござりませぬとスッと透ぐらひで臭が
薄うござりません 夢「どうぞ大きな音のする様にお頼申て玉
玉やッ引とのハ屁が出ると臭ひを鍵屋といきて互のござんから
代銭相まし后ほど取によらし女もうハ長波大文字書せお呉
身を使ませんぬハものでもねへから 主「ハイとまりましたト
薬の代をおいてまかりいでる夢助ハ大くハ出る 主「へイお有りハント いづくへ安倉ぐらゐの夢助の友だちぶ公といふおとこ
ぶ「コウ夢公お行くんだ 夢「おぶ公モウ女ぶりがさナ ぶ「初酒
沢山菜漬醤油の諸実ッサ夢公さんぶんきって機嫌二三度夢さ

梅公ハ宝物だか聞て呆れらア久しぶりで一杯やらかじやアねへか
此頃聞ア役にがひらくどやアねへか　梅「あふけ口斯ら損口に係て
大きなめに逢けと延喜直しにそこらでせらう　ぎよ「ウントよんべは
大きなめ散財三番叟か　梅「マア聞なし此方さるお大名の殿
さまの御居る人誰かて見ろがそりやアモウてへそうなもんだぜ　ぎよ「
土様大名ご山王さまとでものみ家八雑種まの空積様ぐらう
梅「マアいくらか聞なし　ぎよ「ウン聞なせ　梅「そりやアモウどえらい物で
なんでもねへものハねへぜ　ぎよ「そりやアないねへでも知てさアよ

大名でなくってもお行でも無物ハ其の人ならうなんざ他所にも
ねへものまであるとのハねへけりやア理にも当らねへぜ　梅「そこのま
ちの丈でもそんなさうのふろうヨ　ぎよ「そりやア池がきうふでも
あるからア言ハねへ考て見さつし　ねへものがねへから海がモシ有物が
ねへと言って見さつし　マアざつと調べんだア支度来ぬぞ　梅「
さう言まお咎めをせずとも聞ねへ斯だア　ぎよ「甲と云ハ亀の甲ら
主の猪の首の据らけへ亀の甲がひつくのら甲じやアねへ猪首
だぜ　梅「主じやアひるめえし　ぎよ「うぜへ　梅「猪首がねへから年中

散

夢補道に
遭て
欲情を
海内一法
散

頭部六ぐらゐ　夢「ちげへねへ〳〵　妻「そこでまた斯だ　夢「アく
又ある白膏赤膏萬能膏だあり膏に按摩膏ら　妻「マア
眞實な相談ぐらゐ交ぜに聞いし「好ぞ交ると出來る悩も
出來ねへぐらゐ七種蕃椒の蕎麦売じやアあるめへし交て
ふゑるといふ訳もあるぞ　妻「そんなら只いくがマアべらぼうで儲し
斯ういふ理屈ぞ全体誰にも今まで嚼されねへが世の中
福禄神さまに文魚と紙屑籠を一生もち物にして願を
かけて福を祈る所が滅法な利生がなくて魂を売る

法を教てやるから種々取入て見な金の蔓になるぞ
目きゝねへのヨ其筈だらうじやアねへ人の髑髏がまゝのめぐらら
魂だからぞ何も持て来る事が出來ねへぐらゐ者大
名ある川でも粟丸弟がてんりんで不足をかつて宝の山へ入り
手ぶらで手を空しく帰るさだかりヨそこで今度ハ福徳屋の
隠居に魂を入かへて奉授所から安心さゝてところ寺の宮
進ところの名目で番頭から金を請取ところを欲にあるから
熟く相槌をうつて金を受取て呉さへすれバそこで魂を戻

其で金を出しあるのヨ　むまくらへどやうねへか山なにして
紙の注文ハどうだ　ぎぶ「注文ハ死人が捨だがどうもけんのんだぜ
ぎつと聞と主の固頼にあつて魂を呼寄る提灯持よあるのだらう　美「そふさ提灯も沢山もあるもどうやうねへむらへの
髑髏迄入門て居てまる仕るのだらう併にあつた時の相棒に甚
多門て甚云ばいくのヨ　ぎぶ「相棒二世功徳無量じやあらう満
具足か　美「破れ鍋へ火の中三ツ具足か　ぎぶ「さうだ火の中水の
底とはいふのか　美「そりやア二世と契ひし女の言ぐさの但し

豆腐屋の門口で焼豆腐の言ぐさうといふだらうが見ぬ鬼も
角も狸屋で一杯やらうト（二人は青の所のかどを通るとあちらの売れんかいけんだ見え）美「所でト
骨折ぎよきの約束ハまとふんせ大門ちやアいけねへぜ　ぎぶ「誓ふ
知ごうしまとふんも瓢箪もありぐなすく女郎ト要まぬなさえん
みツ嬉嬉酔ふこうし酔て半生のでうし大丈夫金の経掛ヨ
美「福禄屋の隠居ハ所内の流利で今日ハ邪だから浅草へ
往てモウ帰る時分だ　ぎぶ「それじやア爰の去地の咎きでうぞ
百亀といふ白い亀の甲じやア空　ぎぶ「ヲツト亀が備か知らねへが様

首の洒落ハモウ出兎ぞやトいやらしがらせ菱「ヤア隠居がミへるぜ
来さうし「そんなら菱公「ちよいとたづねるぜ「合点
だト此言合せの咄物ハ尻から頭の兆なるべし○菱助ハ
毎度魂を入替別て此日ハ鼻紙袋ニ小遣の外ハ何ほど
有活ニハ己が体へ他の魂を入るゆゑ懐中物を落し他の
体に這入ても持べき物ハ身を放さず首尾よく隠
居と魂を取替て福徳屋へ行居たるが彼兆あてし葉
店を通りかゝる煙管を清元と引替て件の小僧の風

呂敷ニ包ませながら福徳屋ぞいそぎける○名ニし負ふ
花の東の通り町土一升ニ金一升一刻価千金と諺ニ
いふ繁昌ハ金のなる木の植所実ニ家居も軒ならべ
暖簾の文字も福徳屋億萬とりし質両替主
人ハ店の次の間ニ番頭の忠助とその日の出入金の
帳合 それぞれ女房ハちと火だちの つきあうてと茶せんがいひけ 女房へかんニ御隠居さまが
煙草を長松ニもたせてお帰りなさるさかなんでもよく
お気が付まんね人煙草のまひのをれぞんじろ旦さんモシ

舌へ附て置ませうか　亭主「ムヽト（いふさだうりのうしや煙盒を来てあるか来女房ハうさその）
うつを　女房「コレ亀やハ隠居さまのお煙草盆を持て
来や　お引出し人　お初様に入て置て旦那のお烟草入
へも入ておきヨト（や女にいひつけきびしきの　きざみたばこを女房一ッぷくのミ）モシ旦那是ハいかいもの
より金性よりお煙草でござります　忠助どんそこ様の
煙草入へいれて呑んでごらんト一トつまミ遣る　忠「ヘイこれハ
有がたうござります　かど切も細うて香ひがよう
ござりますル　亭「どうして　おまへも一ッぷく呑で見やうト

いふゞ女房をいひ付て亭主のまへへ出す　「マアぬしいかゞでござんすかまハまし格別で
ござりますからサ　亭「さるかど善恋の多ハ葉ざつウ丁
子入のせうでもひる誇みへ入るなんでもせうふうな国
房ざ忠助一ッぷく呑で見なせへ　忠「ハイくいくいでござりま
せうト一ッぷくのミ　寔に結構でござりますト（いひつゝちでんち三太つがれくもどつて）
（きやうさきにあとてうちやん出してを）　亭「コレ三太が小金屋ハどうして勘定をよと
あてがつ三太「お留守でござりませんで　跡からかしこさせて遣るとやら
まする　亭「そんなうかつと早く帰るものにごまかす道をな

喰って居られる時の明ねへトバ又　三へイヤ何も喰っては居り
ませんが大て帰ります　亭「まるで口のへらねへ犬で帰って今
までうろうろものゝ十丁も廿丁もかゝりハ来たしく出逢ハ兎
角使ひに出ると買ひ喰ひをするり遊んでる犬の數合せ
世話をするりいくら言ってもきかねへ全体年季奉公
来て居るものが親のうちに居る時の心持で楽をする
なりして遊んで居てハすまねへぜ他所などと違って表の
内などの風義ハ朝晩の食物も気を付て勘弁して

使ひなどにも出るし些の事でも手習十露盤でもおぼへ
させて遣る気で世話をやいてやるのに己が身の為に
なる事を思ハずに小言だなりいふ中ましい主人だと斗
思って了簡違ひがいるから役にも立ねへ口だなりへら／＼しや
べっていくら言付ても膝を出して己が気にむかねへ立と
何でも返事もしねへ主人を主人と思ハねへから饅頭の
やうなんぞハ屁とも糞とも思ハねへのだよく考て
ごろ寝小便をしても朋輩の世話になりながら朋輩

言語は
遑しくして
主従
丁雅を
徴せ

喧嘩をきらひますが侭ね了簡でハ道ひ度でも外の者の示しが出来ぬゆゑ余儀なく浪人させねへけりやアならねへ忠助さうじやアないかへ　ゑもん左様でござります長松ハ素直でござりますが兎角三太ハ強情でいふ事をきゝません度々叱りますが佛頂面をいたしまして私などがあへしましたと戸障子をがたぴしと手荒く明立を致しまして手燭や煙草盆を蹴ちらしまし既にもお客の茶碗を火鉢へ蹴付てこなごなにいたしました事もいくどとなくそれが難義で

ござりますゆゑ今日の処ハ私がお詫申ましたゆゑ以来気を付る様に申付ますと是三太こゝへ来て旦那のおしかり付る事を能耳の底へとめて置ませぬ様にきろがつく今日の所ハお詫をいたしたれでも御主人さまのおしかりをうける事を糞とも思はぬの屁とも思はぬのとりよ様がまるでならぬ急度気を付させぞト忠助がそばからいふ三太ハ気付る　おちおちハあとにまつてわざと　三「ハイく糞とも屁とも思ひませぬから御免なさいましト　忠「ソレさうく　それでなければなりませぬ御主人さまをすれバ糞と思ひ屁と思へねバ

まづ夫が主と家来の礼義といふものだト だちを叱て かゝりける
いぜんの薬のきゝめのふしぎにてちからのかぎり亭主ハ女房も
だんなの忠助もおなじやうにぶう／＼と七つ八つ女房ハめつたに屁をして
あまり／＼ぶう／＼の音にて亭主を初め女房ハしつきの屁背を
あそびあるき／＼がやがや屁でもゆく女房もおもへども大きな屁をひとつ
「ぶう引ト 忠へ それ三太 旦那をひの通りに思へがよいト よみ
ぶうとおもとぶう
先「ぶう引ト 一ツ出 忠「是ハあきれた 亭主まじめな顔で
通りに思へがよい 三太「それから糞と思ひますのハ 何と
いつてもやせうト
いふうち亭主も「ぶう／＼ぶう／＼とおならがでるのに女房
もうもくとであるけるとひゆう引
トおつけるとぶう／＼ちやうどてうづ
いふまへにでるゆへかゝりなりねて「鳥渡手水場へト
お亭ハめづらしく女房ハ女ぶり
「ぶうきりト大きなおならの

らくなけれども雪隠へ出かけ遠入らずより痢病をわづらひ病人をよんでもとめれども止らず
あまりにおどろいて三太へたのみ小者のうちより三人そのまゝ
おく人へゆきとゞけりぶつ下女まで来りおとをさせけり
三太へ はまりかねる「ぶう引ト 是ハ真平ごめん屁が出ます
あきとト 主の方へ出てゆけバ下女ハ
くさくにまらぬ尻をまくりて 「ぶう／＼ト出る
すこしも臭ハおならで屁が出るト 下女「おならどんが
おならをいふてまづ大きな放屁ごとバ 下女「放屁に
お世話 長松へ お菓子でも素湯でも腸にあげますから
咽がおかしきまるを見へてぶう／＼とおならいたします

トのひあがつブウ／＼と家内中がおそとのおとさこそせもおく／＼とさ／＼ぢあの
うちへコトづひけまでどもとあどももう／＼よのぢろゑへみろつぎつてとこゐるえきちぐ
うろたへるやうへどのりのいや「日下殿嵩房御見舞まうチすト とせまうおおろとお きこりて家内ぢうの
ぶう／＼の声をせきこそ 日下「イヤ是ハ御主人も御内室もでつ／＼ト おつしやる
イヤハヤ義敬どのも長松どのも三太どのおつめどのもでつく
御隠居へいつでかきまてさイヤ御家内中「ぶう／＼ト上
下へ入込 銭湯ゟイヤ屁ん湯でござるウト きよつめきれてござるもつぎおさりを
かへしまするそれ 女房「こまへト御所へ嵩房さまがお出なさるかへ
マアお聞なさつて下さいまし今朝かど隠居がこやげの

饂飩をせ給ますよりより外に何もあげへいどざりませんが家内おちう
おならが出まして私ハもちとまりきりまして外でろり人どうり参
らそ居りまし此頃ハ病気もござりませぬがいつも方ハ
ござりやませまひが不思議でござりやませ 亭主「いやサ放屁が
胸のあたりから下腹へ込みやげまして とまりませんまつも
屁らへも放屁にとまりませぬ療治の仕方ハござり
ませぬか 日下「イヤ夫ハけしからぬことござ薬がいるともく 嗜
やうとも書物にも放屁三里是出屁の止る所なりト 噂

第一ニ三里の灸が直にあたる名灸でエスいや放屁とや
ものハ元気のめぐるものでおならをいたしてまゐ腹を立ものハ
ござりません誰も放屁と笑ひますれど屁ハ医書にも下
部の気をいたすものと見へてそこで口鉛気の格言にも放
屁のあとのひき隣の気によりぞかぞとやまをテ屁の寄所へ
玉が寄るとやて屁の玉かな言でお通りかきるとるめが総屁を
放るものでござんへを笑ふとやまれ屁出度るがイヤさみそく
止てあんぜますれ芋や牛房を喰らて膝腹て出ますれ屁ハ

急にハ止らぬもとより臭気も多分が全く左様なりとて
なければ芝居ハ屁のござき療治でござる屎の亡魂放屁の
幽霊ござ仏屁ひり屁の中落屁の方ハ上左様でござる
今日爰ひまする所ハ「ほうび」の出ものがござる切人あまとくる
中にまかりあるものでござるテ格好で相場療でござりますれ
ト述べ終りけれバ亭主「ヘエひりまするハ今日私の宅で放屁の家内
中出ますれまをいれながらござりますれか　早下「イエそんじハいたし
ませぬが丁度的中いたしし所が出るもの癖物所まで

どぶる亭「格好なとうろと申ハ子どもの雪隠にて屎を屎糞
かどもござりませぬ隠居の屎鉢などふ多りまして寒
気の時分の貯へにもいたし置ますが小児が多けれバ俗
にど下直でもおすゝめも不用でござりまする　旦下「イヱサ此家内中
放屁の出ます所へ折ひろくとうろと申もの如雪隠の数と
思ひましてハ御尤至極とうりかと申ますハ紅の花のまで紅花で
どぶる亭「イヤ左様なら家内おそろしで放屁にまゐりまする
ますれ屁よく少人甲遠でござりましやうし是ハ屁爺なまで

めへしまする　旦下「イヱ尾陋れ家ふまづ多ひもの　亭「罷陋の紅
花をくらぶ人をとやらのござり〳〵　旁へ月ニ經さ勿らの爛菓を給
ましたと此まうまでござりまする一ツぷくいかゞでござりまするな
まし二三ぷく呑ましたと聞もなく透しまするまするぞ跡
太きなおとのいたしましたおとらしが止どもなく出ましたひまり
臭くなりましたよろしうござりましたハ先刻ハ爺ふ出ひり
ましたやゝきうまでで爛菓がんを丁稚が湯ひ久しましまして
ひくら近所灰でござりますにもしましてかしてから篝を持て来れと

福徳屋にをとづれ

放屁草乃奇効顕る

すうすうと放屁がどふしてつゞまりませぬものかと亀と長松と
けんくわをいたしまして放屁がとまらねへがいろものかと狼狽
まして放屁を手鑓にまでいたせば極り屁でござりますと放屁が
間遠ましておかしくも何の援も無ませんかんにんしておくれと
申ますとぞんじましたと　日下「長咄にまあのうちいやまあかんハ なんとせんきのぐんでえて
四人ぶく呑ましてこまりましたが全く屁の化物の正体に
違ひござりません手始ハまたしても放屁にあるハ実にまう
志を催ておならを放まいことやのでござる透しおならう先

屁止薬を上ますれば別に屁の出容体をみるにもおよび
ませまい所謂屁の容体さへあらハれますれば屁見から
擦くになりまい屁見からんのみならずやがてなどと
とかく付ハ浮山ひるでないのでのにも屁も豆もおねば極め波で
ござる薬箱を是へト　早下「イヤ是松 又ハそのうちの長松が年りのことを のちやうどいきせいでといふところ
ぜん梯子屁とハ此念のいろき長老家根へひびくるのでハござ
らぬヨ放平嗅平出てる屎子なりとハ大学にも右をうてる
ねうちとをあけて調べ　長太「ぜんたい　国那まで大場下の雲光山

大要寺さまからお使僧がお出なされまするに御隠居様に
お目に掛りたいと申ましてト　亭主は「なんでも坊下の雲
なから山大要寺さまなどとりへの日頃殺さまハとうから毛実
ぬかしおつしやるハテ屁の出る中へ糞ひつたうり来るやうな
早く御隠居さまへいひまうせ「ハイト　でつちハおくへ行く御隠居の忠助ハごいんきよのつめ
ありし生まれのあとつゆへ御隠居さまく御家の御隠居の屁ハおならと申ものひけれバ
御隠居ハ屁をひりましておいでなされまするとて坊ハ小ざうにはなしをかけれバ
ついでの事ハ帳めんをもつて忠助にむかひ
坊「そ松僧ハ住ちの使のなるでござりますに
御家の隠居の御不快でお出なさるに強てお目に掛りたいとは

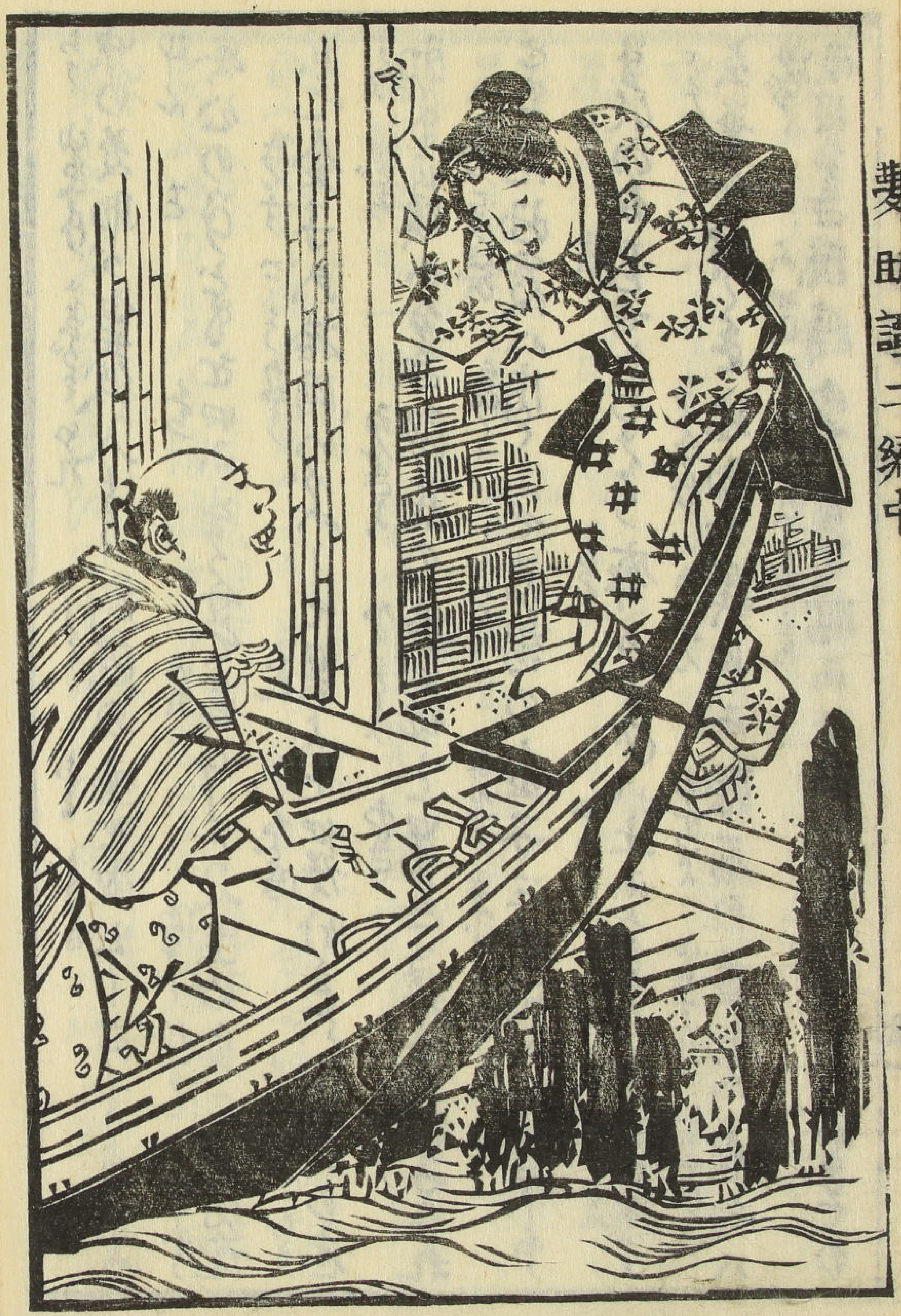
にも及びませぬ和尚申聞ましたには葉でお出しいやましたこと
御家此度檀家一同御旅々永代月牌の香花料思召し
ありがたく存ずるにお聞くださればかたくへもその振合にて
願ひませぬ御家まづ此方さまなどハ一檀方のなか御家御若
労なかくろしく願ひまする様にと申付まするに御主人へ
右の次第を何分にもよろしくト　此ばゝ忠助ハ帳めんをもつて奥へ引込やうとするを見て　亭主「
且那寺から香花料を施主に付とハイヤ今日ハあり
がたく家内中屁の病でひり通しでござりますと申てハ

芝ゟ湯しまのやうでござれども日中に嵩魔宿へとうろの花
御相撲がなり雲光山大要寺さまかくハ香花料に付け
其の身ハまま人でも放屁に敵ともすることハおりませんが腹も
ぶらく偏するの変りなく先祖の放屁をいたしませぬ屁好みの
ありませぬ義なれど此方隠居へも申しませずして御挨拶を
いたしませぬお目にかゝりませんでござりやすがその
屁まへも放とんであるゆゑ屁ん方様お臭ぎれとぞんじ
まぬ放屁なく御休息なされまし御住寺さまへもよろし

喜く作上げまして下さりましと御挨拶をいたされませト いへバ忠助ハ
あたまを 忠「どうも屁づくしでやりましたと鼻くさの掻で屁ん
でござりました左様やりませうト言ひながら 忠「コレ〳〵長松お嬢
ご様にお屁がたひと奥でお屁がある屁ひと屁んだを
大きく言うたらト 出て行 ト 長松「ヘイト今日ハお屁んだ
大きくハ聞こえませぬ大きく申すと「ぶツト申します
○福徳屋の内ハ放屁さかんで大どうとこどもぶう〳〵と
いたすゆゑ四ツ谷衛門のうちの主人親父の

様子ぶらくに困りはて臭屁嵩庵の屁どめ薬もきかず
効験ハさへぎりけり去程に隠居の麦助ハおなじ薬を
屋敷へ参り囲ふせんと巧ミしも思ひの外に福徳屋で
屁交来りてお姿を屁にて嗅せハ甘ぬのをと魂返し
返魂丹も一抹機嫌で寝るうちに漸に遠くなりし
り人気の毒に思へども是が実の屁放て屁まぶらる
との姿のまゝり後悔先に立ざれバ老居をまれバさ
奥しとひそかに番頭の忠助を隠居所へ呼よせて懐

中の麦助が鼻紙入より別條の妾を夜ぬしきうらひける
無心の事どもこにまうせて言らしく主の息子に内證
にて金子五拾両つかはして是よと說ひ置れバ番頭の忠
助も日頃にあらき隠居の放蕩と呆はてゝいる様子なれ
ども先此度ハ内々にて五々の金子三拾両をおくとしや
まとハ此末できつくなる事がよひハ止にならされと世の通り
忠言を速くも忠助が異見に隠居の麦助ハ表向ハ
面目なき風情にて金を懐にしまひそかにおりての



健老奪體して妾宅を訪ふ

様子を見て番頭ハげそこらに居たりし鼻紙袋と煙とりに渡
差て早く駕を戻さんものをとうろつきながら身居たり
○夢助の隣ハ大福徳屋の隠居の駕遠入りし始
表向ハ夢助なれども公ハ隠居の内なれバ二タ川の妾宅ハ
烏有のうれひが多いのを眉に積貯のしるべをかねて
照へかくのなれバぶらく独夕方より小舟で出かけ
いつもの通り川岸の裏口からくとうけバ小女が御隠
居さまかとやんで出戸を細くひらき夢助の姿を見るより

びっくり仰天　女「おや夢さんハ雅でござりますか御隠居さん
ハとぞんじましたら　夢「へ　知れねへ人だ　知れねへお人だよト人の内へ案内もなく這入た
気　わがお出をしらねへ人があるものかとなかなか顔をしてまゐ月が覚
人の気さきもなろうがと「是サお出でござりますよ　女「是も夢ハもうわけてあつたの御人でござりますが
ねへ類でも知らねへ人ヨト
言ふ女「是サおちよこやぞう　このごろおかけなさん
なヨ御隠居さんおちよこのうちハおまへ入らつしやれ
なト　夢「お茶さんハ雅様で

どふりまたんぞやく門違ひでござるまいかせう ト ふたりのものハ
あんまりきれいに見たやうだがそれハゆめかうつゝかまよひしハむりもなし
美「て手前へ今見へどよふかして
居るか見付たれものが来さまに狐か狸に化されさ
のかサアく変を掛がねひらけて仕舞がいゝ ト つくとあんどんへおりぎまへの
ことさらの六分ぐらゐもの口をひだちのつきさ入きたごやくんをとつてどうまうりとき
まうりまへあんどの女も下女のおちよこともあきれてつらと家をまくるる
ぶるくあるんなから
美「おとうりの伯父さん早く来て下見
なさんれなんぞちか来やれ人がまちへひがりて大変ごヨウく ト
ありうさわく
小女もともに
女「たれぞ早く来ておくれよアレく押入の戸を
明て何か出して居るヨ来ておくれ人が盗賊ごヨウく ト
家内大勢
きたれどもそのけハあたりぬゆめ助あるゆめども一ヶ年ばかりハこの家のきやく人がありこまよの
ことゆゑきうやくけしきハ見もつかなしさまどもきえしよのなのものども八二人の
女のたりさうやく家のなかどろきてんでに騒
あぢきさもぶりなからい一家よりかけつける
好とき夢助の魂かハ福徳
屋の方にて魂を戻せしかバ其の夢助の体ハもとの
魂を入替りて此後動に膽をつぶし逃んとすれども大
勢よりまきて既にあやうく見へたりけり

夢輔譚二編中之巻了

文布屋

本多一
ぬのや